

考え，議論する道徳科を要とした道徳教育の展開
～充実した授業と学びを生活等に広げる取組，これらを支える確かな評価を通して～

徳之島町立神之嶺小学校 教諭 深美 陽市

－ 目 次 －

I	研究主題	2
II	主題設定の理由	2
III	研究の構想	2
IV	研究の視点ごとの実践	2
V	研究の実際	3
	1 研究を深めていくための体制づくり	
	2 考え，議論する授業の充実	
	(1) 単元で行う授業	
	(2) 心を“見える化”ツール	
	(3) 役割演技等	
	(4) アンケートの活用	
	(5) 学びの準備（道徳開き）	
	3 実践意欲の向上	
	(1) とくとくの木	
	(2) 道徳コーナー（教室掲示）	
	(3) 道徳日記	
	4 指導と評価の一体化	
	(1) 評価シート	
VI	研究の成果と課題	10
	1 研究の成果	
	2 研究の課題	

【参考文献】

- 「こだわりの道徳授業レシピ」 浅見 哲也 東洋館出版社（令和2年）
- 「考え，議論する道徳に変える教材研究&授業構想の鉄則35」 加藤 宣行
明治図書（令和2年）
- 「考え，議論する道徳に変える発問&板書の鉄則45」 加藤 宣行
明治図書（平成30年）

I 研究主題

考え、議論する道徳科を要とした道徳教育の展開

～充実した授業と学びを生活等に広げる取組、これらを支える確かな評価を通して～

II 主題設定の理由

小学校では平成30年度から、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）が全面実施となった。道徳的諸価値について考える中で、自分ならどうするかを真正面から問い、自分自身のこととして、多面的・多角的に考え、議論していく「考え、議論する道徳」への転換が求められた。これを好機として、本校では、道徳科についての理解を深め、指導方法を温故知新の姿勢で改善し、全職員が同じベクトルで道徳教育を展開していくこととなった。また、児童に目を向けると、ねばり強くやり抜く力や自己肯定感等に課題が感じられた。この思いは保護者の思いとも合致し、本研究がスタートした。

1年目は様々な実践を積み重ねることで授業の充実を図り、2年目ではその授業での学びを生活における実践意欲につなげるように方策を練ってきた。そして、3年目となる今年度は、これまでの2つの視点を基に、改善を図っていくための確かな評価にも範囲を広げて、研究を進めてきた。

III 研究の構想

本年度は以下の視点で研究を進める。まず、授業の中では、道徳科の評価の視点を受けて設定した“期待する児童の姿”を表出させるために、様々な実践をすることで「考え、議論する」道徳科授業の充実を図る〔視点1〕。次に、このような授業での学びを学校生活等での実践意欲につなげるために、授業と授業外で手立てを講じる〔視点2〕。

そして、評価シートで継続的に学習状況を見取って評価をすることで、児童に自らの成長を実感させ、学習意欲の向上につなげる。また、教師自身も自己評価をすることで授業改善に生かす〔視点3〕。こうした3つの視点からのアプローチにより、全校体制でよりよい道徳教育を展開していくことを目指した。

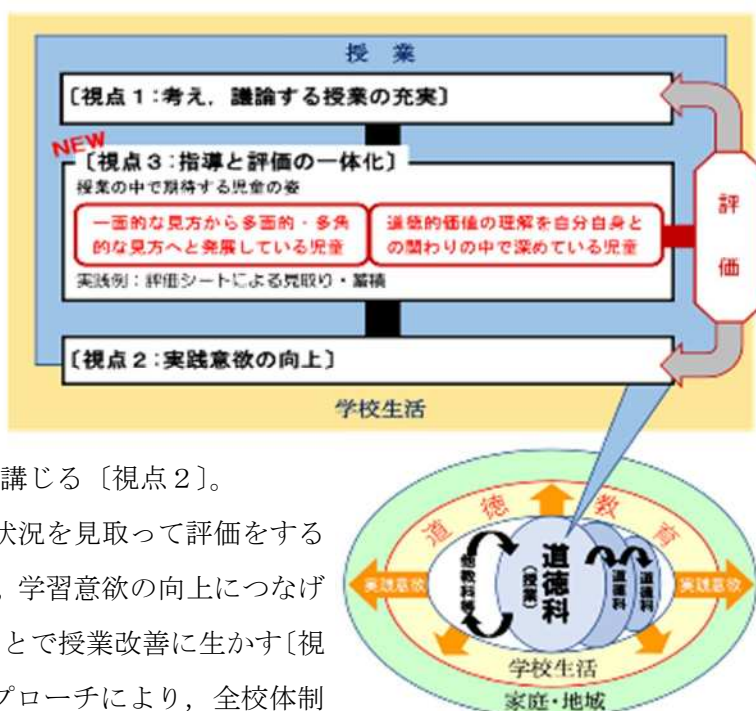


図1 研究の構想図

IV 研究の視点ごとの実践

研究の構想にある各視点を受けて、全学級で共通実践してきたものと各授業者の工夫により実態に応じて実践してきたものを次ページに示した。今年度、新たに加わった視点3においては、評価シートを導入することで指導と評価の一体化を図るようにした。

表1 研究の視点ごとの実践

研究の視点		全校での実践	各学級での実践
視点1	考え, 議論する 授業の充実	☆ 単元で行う授業 ☆ 心を“見える化”ツール	・ 役割演技等 ・ アンケートの活用 ・ 学びの準備 (道徳開き) ・ 変容の見えるノート
視点2	実践意欲 の向上	☆ とくとかの木 ☆ 道徳コーナー (教室掲示)	・ 道徳日記 ・ ゲストティーチャー ・ 他教科等との関連
視点3	指導と評価 の一体化	☆ 評価シート	・ 学級担任以外による授業 ・ 実態に合わせた評価シート

V 研究の実際

1 研究を深めていくための体制づくり

今年度、体制づくりのキーワードにしたのが「自分事」である。表1の実践を料理に例えるなら、ぐつぐつと煮込むことで旨味が出て、味は洗練されていく…その時の鍋 (=体制) と火力 (=意識) が重要であると考えた。鍋なしにじっくりと煮込むことはできないし、鍋が立派でも火力が弱ければ旨味は出ない。それぞれが実践するだけでなく、協働体制を整え、全職員が本研究を自分事として捉える (意識を変える) ことが重要であると考え、いくつか取組を行った。

まず、道徳科における、本校なりの「基本の授業展開例」を作成した。



図2 基本の授業展開例

これを基にして、研究の土台となる授業展開を揃えたり、検討したりするねらいがある。自分たちの生活を想起しながらめあてを立て、教材を通した学びを経て、再度自分たちの生活に戻るといった展開や、終末では「わがとも」というキーワードで振り返りをするなど共通実践事項とした。また、中心発問は教材と生活どちらですか、めあてはどのように立てたらよいか等について意見を交わすことで、本校なりのスタイルを確立させていった。

次に、授業の相互参観を始めた。写真1のような時間割を職員室に掲示して、各担任が“カード”を貼ることで各学級の道徳科がいつあるかが分かるようにした。「見られる意識」で授業は洗練され、各学級での効果的な実践が他の学級に広がるきっかけにもなってほしいと考えた。ただし、学級の実態や扱う教材等によって、参観を控えてほしい場合には、カードを貼らないこともでき



写真1 相互参観のための時間割

るようにした。

更に、学期1回の研究授業を授業者と共に構想する授業構想班を新設した。

学年部のない本校ではこれまで、研究授業が授業者一人に任せっきりになってしまうという課題があった。そこで、全職員が3つあるいずれかの班に所属し（学期1回なので3班）、授業者と共に教材選びから授業づくり、模擬授業等を担うようにした。授業者の負担軽減というだけでなく、全職員に研究授業も“自分事”と捉えてもらうというねらいがある。

また、“よりよく、もっとよく、更によく”で実践を増やし、手厚くするだけでなく、コスト（時間と労力）とパフォーマンス（効果や成果）を天秤にかけて、実践の簡素化や削減にも取り組み、業務改善の視点を取り入れ、全職員が納得して研究を進めるようにした。

2 考え、議論する授業の充実

(1) 単元で行う授業

1 単位時間完結で行う授業が多い道徳科において、授業相互のつながりをもたせて、継続的に道徳的価値の追求ができるようにした。より深く道徳的価値を理解したり、ねらいとする道徳的価値における見方・考え方をより確かなものとしたりするために、3時間をひとまとまりとした「単元」で授業を行う。本年度から全学年の年間指導計画に単元で行う授業を位置付けている。実施時期は各学級の授業スタイルが固まる2学期以降に設定した。各学級では、単元を重点項目になっている内容項目や各学級の実態に応じて計画した。

表2 単元の計画〔3・4年生〕

時	テーマ	教材名	主題名	内容項目	充実の手立て
1	本当の親切	三つのつつみ	思いやる心	B 親切, 思いやり	○ 全3時間とも同じめあて「本当の親切とはなんだろう?」とした。 ○ 2・3時の導入では前時の各児童のまとめを提示して関連を意識させつつ、違いを明確にすることで課題解決への意欲を喚起をした。 ○ 掲示物や道徳日記も活用した。
2		心と心のあくしゅ	ほんとうの親切とは	B 親切, 思いやり	
3		絵はがきと切手	相手のことを考えて	B 友情, 信頼	

第2時の中心発問では以下のような深まりのあるやりとりがあった。また、3時間分のまとめを“直方体”にすることで、物事を多面的・多角的に捉えることを具現化・意識化した。

クルクル回すと3時間分の“本当の親切とは…”が見られる。

見守っているだけでは親切をしているとは言えないよね。相手は知らないわけだしね。

前の時間、「本当の親切とは人のことを先に、自分のことを後にすること」と言っていたよ。主人公は用事があるのに、心配して見守っていたから親切って言うんじゃない？

確かにそうだ。相手に伝わってなくても、自分が思っやっしていれば親切なんだ。

図3 第2時の板書と児童のやりとり及び“親切直方体”〔3・4年生〕

(2) 心を“見える化”ツール

教材を通じた学習において、「考え、議論する」児童の姿を引き出すためのキーワードが“見える化”である。うまく言葉で言い表せなかったら、自分の考えを整理することが難しくなることも多い。そこで、児童にとって言い表しにくい部分や、自分やみんなの考えを一目瞭然に“見える化”し、相手の考えを理解することで思考が深まり、「その通りだと思う。だって…」や「そうかな？ わたしだったら…」という言葉が出てくるようになる。「考え、議論する」児童の姿を引き出すために、教材や実態に応じたツールを使い分けることが充実の鍵である。

ア 心情メーターを用いて“見える化”

心情メーターとは、ハートを自分の心と見立て、前向きな心を赤色、後ろ向きな心を青色とし、色の割合で今の心の状態を“見える化”するツールである。「前向きな気持ちではあるが、ほんの少し心の弱さもある」などの心を表すのに最適である。赤色と青色がくっついた画用紙を左右に動かすことで、色の割合を簡単に変えることができる。本校では全学年、一人に1つ心情メーターがあり、多くの授業で活用している。



意見交流の場で活用〔1年生〕
心情メーターを使うことで自信をもって意見が発表できる。場の工夫も行うことで、児童同士のやりとりが生まれ、議論が活性化する。

役割演技時に活用〔5年生〕
役割演技時に心情メーターを首にかけてすることで、言葉と心情が裏腹（例：本心ではないが、許す等）な状況も“見える化”することができる。

心情の変容を残すノート〔5年生〕
学習前後の心情を記録できるようにしたノート。変容が分かりやすいため、児童自身の振り返りだけでなく、評価にも役立つ。

図4 心情メーター等の各学級での活用例

イ その他の心を“見える化”ツール

心情メーターの他にも心を“見える化”することで、「考え、議論する」授業を充実させようという実践が各学級で行われている。

表4 “見える化”ツールいろいろ

心情シーソー	心情曲線	感情カード
<p>主人公に対する印象を「悪い」から「悪くない」の5段階で判断させ、その理由を言わせる。人数の多少によってシーソーが傾くため、それぞれの心情と全体の傾向が“見える化”できる。</p>	<p>教材を通じた学習の最後に、主人公の気持ちの上がり下りを曲線で“見える化”する。弱い心やうまくいかない場面を想起させて、人間理解を促すことができる。</p>	<p>気持ちを考えたり、答えたりする場面で、感情カードの中から選ばせることで、今の感情を的確に表現することができる。黒板に貼ることで、その時の感情を残すこともできる。</p>

(3) 役割演技等

道徳科において質の高い多様な指導方法の1つとして推奨されているのが「道徳的行為に関する体験的な学習」であり、これは役割演技や動作化等のことである。実際の問題場面について実感を伴って理解することを通して、道徳的価値の理解を深めて多面的・多角的に物事を捉えたり、問題を自分事として考えたりすることをねらいとしている。留意点としては、何のためにさせるのかという意図を授業者がはっきりと持ち、演技の設定や状況を見童が把握していることなどである。

本校では、「役割演技等のススめ」を作成し、役割演技等における共通実践事項をつくり、ねらいに応じて実践を重ねている。

動作化	役割演技	
		
<p>自分事と捉えるために〔5年生〕 主人公が失敗を謝るも、許してもらえないくやしさを、その後、立場が逆転した時に許すことの難しさを実感させるために動作化をさせた。</p>	<p>「…」を考えて演技〔6年生〕 横たわる逝去した祖父を前に「じいちゃん…」に続く言葉を役になりきって演じる。自分の経験を基にして、一人で行う役割演技である。</p>	<p>天使と悪魔カードを活用〔特2年〕 ズルをしようとする役（悪魔）と止めようとする役（天使）になりきっての役割演技であり、立場を明確にすることで役に入りやすくなる。</p>

図5 役割演技等の各学級での実践例

役割演技等では相手役を教師が務める場合もある。例えば、演じたい見童がいない時やいじわるを言う役や万引きに誘う役など見童が演じるには抵抗がある場合は、教師自らが役割演技等を行い、雰囲気を作る必要がある。その他にも、「先生を説得してみよう！」と“挑戦”する役割演技もある。写真2は、参観に来ていた校長に“きまりを意に介さない家来”役をしてもらい、見童は“厳格にきまりを守ろうとする門番”役として、校長を説得するという役割演技である。列をなし、こぞってきまりを守ることの重要性や意義を訴える見童の姿があった。〔3・4年生 教材「雨ととの様」〕



写真2 挑戦型役割演技の様子

(4) アンケートの活用

見童に自分自身の生活やこれまでの生き方を振り返らせ、自分事として考えさせるために、事前にとったアンケート結果を導入で提示している。アンケートによる導入段階の充実が、教材を通じた学びにおいては、主体的に道徳的価値を追求する原動力となり、終末段階においては、実践意欲につながる振り返りで重要になる。また、めあてを立てるために、アンケート結果を活用することも考えられる。「わかっているけれどできない」といった現状をアンケート結果で明らかにすることで、めあてにつなげることができる。こうしてできためあては道徳科における質の高い多様な指導方法の1つである問題解決的な学習につながっていくことになる。



図6 アンケート結果の各学級での活用例

大島地区で採用されている日本文教出版（日文）の教科書にはデジタル教科書が付いており、教材の朗読などの機能が付いている。その中に、写真3のようにしてアンケート結果をまとめることができる機能もある。アンケートを提示した後に、切り替えをせずに朗読につなぐことができるので便利である。



写真3 デジタル教科書のアンケート機能

(5) 学びの準備（道徳開き）

3・4年生では、4月の最初の道徳科を、“道徳開き”として、「これから1年間、毎週1回、全部で3回授業をするのは、みんながよりよく生きていくためです。色々な問題に直面したときに、一人であるいは周りの人の力をかりて、解決していける力を付けるためです。一人一人の人生に関わる時間なので、元気に真剣に取り組んでほしいです。」などと道徳科を学ぶ意義について話をします。続けて、「これから1年間、道徳の授業ではいつも大切にしてほしいことがあります。」と言って、表5に示した“学びの準備”を、具体例を示しながら説明した。繰り返し振り返ることができるようにラミネートして配付した。

表5 学びの準備をまとめた下敷き〔3・4年生〕

	学びの準備：児童 ※黒字は口頭での説明	授業における意義：教師
①	しょうじきに言おう 本当のことを言おう。まずはそれが一歩目	自分自身を見つめるために、自分の弱さや失敗も表出させる。(人間理解)
②	自分だったらと考えよう もし私がこの場にいたら…と考えてみよう。	教材の登場人物や友達の考えを通して、自分事として考えさせる。(自我関与)
③	前にこんなことなかったかな？ 今までの自分をふり返ってみよう。	これまでの自分を想起して授業に向き合い、自分のこととして考えさせる。(自分事)
④	「べつの見方をすると…」 見方を変えれば、ちがって見えるかも？	他の価値を見いだしたり、いつも考えたり、立場や時間など条件を変えたりして考えさせる。(多面的・多角的な見方)



A4サイズ。ラミネートして全員に配付。いつも教科書にはさんでおかせる。

3 実践意欲の向上

(1) とくとくの木

「とくとくの木」(図7)とは、道徳科での学びを広げ、実践意欲につなげることをねらいとした全校での実践である。2学期までは、友達の良いところ探しをして、それを一人一枚ずつ「葉っぱカード」に書いて掲示するというものである。3学期からは、道徳科で学んだことやそれを実践したことなどを書いていく予定である。「とくとくの木」は、本校のシンボルツリーであるガジュマルの木をモチーフにし、2階の3年生以上用と1階の1・2年生用がある。毎月14日を基準日として、月1枚のペースで書いている。

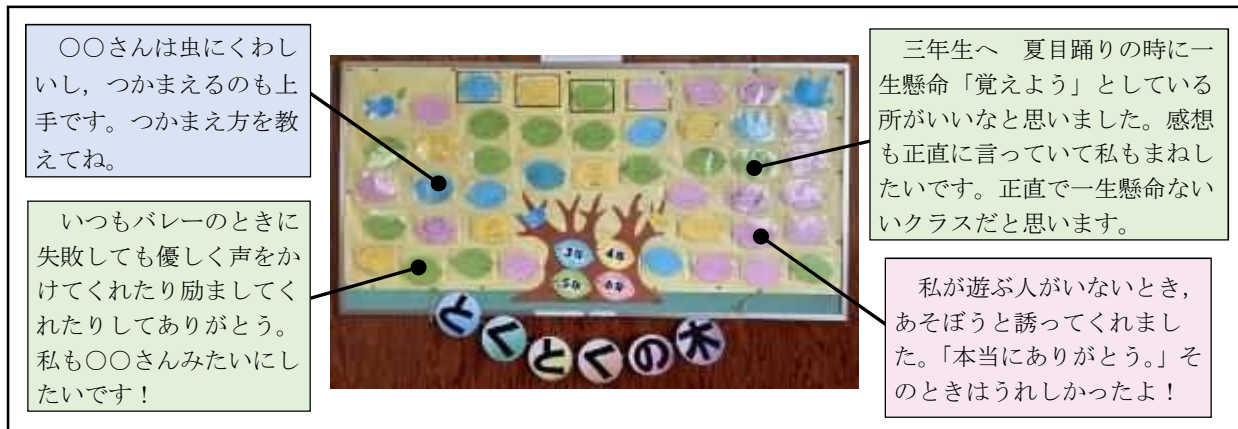


図7 学びを広げるとくとくの木(3年生以上用)

(2) 道徳コーナー(教室掲示)

道徳科を日常の指導や学級経営にもつなげていく、あるいは、授業での学びを実践意欲につなげていくために、道徳科に関する掲示物のコーナー(道徳コーナー)を各学級に設けた。授業毎に必ず作成しなければならないわけではなく、授業の内容や授業の様子等を踏まえて各担任が判断して作成することになっている。

写真4のように、板書の写真や教師からの一言、児童の発言や記述をB4サイズにまとめる形式が多い。その他にも、道徳ノートや道徳日記のコピー、教科書の挿絵、教具を掲示している学年もある。



写真4 道徳コーナー

(3) 道徳日記

道徳科を実施した日の日記に授業のことを書くようにしたのが「道徳日記」である。授業を家で(時間をおいて)振り返ることで、新たな見方・考え方が生まれたり、こんなことをやってみようという実践意欲につながったり、家庭で道徳科が話題になったりすることをねらいとした実践である。

授業の終末で新たな疑問につながる問いをすることで、発展的な学びの機会にすることもできる。日記のいくつかを教師が読んで紹介したり、道徳コーナーに掲示したりするようにしている。

4 指導と評価の一体化

(1) 評価シート

学習指導要領によると、道徳科における評価では、「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。」とされている。また、評価の視点として2つが示されている。そこで、この2視点を受けて、以下の「授業の中で期待する児童の姿」を設定した。この姿を目指して授業を創意工夫し、継続的に見取るために評価シートを導入した。評価シートについては、研修係から2形式を提示し、選択できるようにした。

授業の中で期待する児童の姿	
一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展している児童（多面的・多角的）	道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている児童（自分事）

評価シートは、授業前と授業中・授業後と書き込むようになっている。授業前には教材名や主題名等とともに、2つの期待する児童の姿を授業ごとに具体化した「期待する学習状況」を決めて、書き込む。これが、具体的な評価の視点となる。これを設定するにあたって、多面的・多角的な見方とはどのような見方かということが話題になった。そこで、検討を重ねて本校なりの多面的・多角的な5つの見方を定義した。

授業前に記入（黒字）

「自分事」の期待する学習状況
自分が目標に向かって頑張っていること、挫折してしまったこと、自分がどうしたらやり抜けるかを考えている。

「多面的・多角的」の期待する学習状況
M2 やり抜くための気持ちを多様に、
M3 逃げ出した主人公の気持ち、
M5 グループでの交流

授業中・授業後には児童ごとに発言や話合いの様子、ノートの記事等の「評価メモ」を残していく。なお、毎時間全員のメモを残すわけではなく、「認め、励ます」ための特記事項のみを書くようにすることとした。

授業中・後に記入（赤字）

めあて【目標に向かってやり抜くためには？】に対する児童の考えと教師の評価

※「」は発言やノートの記述そのまま

授業の反省（教師の自己評価）

図8 評価シートの実際〔3・4年「がむしやらに」〕

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 単元で行う授業は、授業を構想するための時間と労力はかかるが、それ以上に、児童の学びが深まる。
- 心を“見える化”することで、教師にも児童の現在の心の状態が分かり、意図的にアプローチしやすくなった。変容も見取りやすいため評価にも役立った。
- 吹き出し教具に各自でアンケートに記入したことを書かせておくことで、準備の手間が減り、時間の短縮にもなった。また、板書が構造的になり、整理された。
- 役割演技をすることで、児童自身も認識していなかった考えに気付いたり、登場人物の気持ちにより近づくことができたりするなど、多面的・多角的な見方ができた。
- とくとかの木と道徳コーナーは、児童がよく見ており、感想を伝えに来てくれることもあった。実践意欲につながるよい取組となっている。
- 道徳日記を書かせることで、児童の学びを把握し、今後の生活に生かそうとしている様子が伝わってきた。また、評価に生かすこともできた。
- 評価シートには授業での様子とともに、発言やノートの記述（エピソード）を記録しておくことで、評価シートを見ながら通知表の評価を書くことができた。
- 評価シートを記録・蓄積することで、評価メモの少ない児童が明らかになり、その児童への対応策を考えることで授業改善につながるがあった。

2 研究の課題

- 発達段階に応じた「考え、議論する」児童の姿を全体で共有していく必要がある。
- コロナ感染防止対策下での議論や共有のさせ方等を工夫する必要がある。
- 単元を設定する場合の指導計画の工夫についての配慮や教材の主題がぶれないこと、指導計画全体のバランスを崩さないこと等を考慮する必要もある。
- 「とくとかの木」のカードを書くための時間の設定（例：朝の活動の時間に「とくとかタイム」など）が必要である。
- 評価シートへの記録はどうしても授業後に時間を使うことが多くなっている。授業中に効果的に評価できるようにするなど、効率化・簡略化をこれからも模索する必要がある。